〔玉勝間十二〕風引たるを咳氣といふ事

此わたりの人、ふるくは、風引たることを、がいきといへりき、宣長がわかゝりしほどまでは、なべていへりし言なるを、今はさいふこと、をさ〳〵きかず、これもふるきこと也、中昔五六百年さきの記錄などに、風病をおほく咳氣と云るせり、

〔伊呂波字類抄志人體〕欬嗽シハフキ、亦作咳欬、　咳嗽　咳呻已上同

〔枕草子六〕つねよりもことにきこゆる物

元三の車のおと、鳥の聲、あかつきの云はぶき、物のねはさらなり、

〔物類稱呼五言語〕咳をせくと關東にていふを、關西にてせきをせたぐるといふ、播磨邊にて咳をたぐるといふ、阿波にてはせきをこづくといふ、中國にて咳をこつるといふ、神代卷に、いざなぎの尊たぐりす、金山彦の神となると云々、又東國にて、咳ばらひ、又云やぶきするなどいふは欬嗽(たはぶき)のちゞみたる詞にて通稱也、

〔醫心方九〕治欬嗽(シハブキ)方第一

病源論云、欬嗽者肺感於寒微者、則成欬嗽也、肺主氣、合於皮毛、耶之初傷、先容皮毛、故肺先受之、五藏與六府爲表裏、皆禀氣於肺、以四時更王、五藏六府皆有欬嗽、各以其時感於寒而受病、故欬嗽形證不同、

〔續建殊錄〕阪南一旅客某者、嘗游學在于浪華、通刺謁曰、吾嘗有濕瘡、百方無効、荏苒至今、其始也、身疼腰痛四肢不仁、狀類于癱瘓、不能危坐、唯趺跏如僧、以得安息、今又加咳一證、其咳不輕、依之晝夜不能安臥、醫以爲勞瘵、束手不療、故來請診治、先生診之曰、此血咳也、非勞瘵也、乃與桂枝加朮附湯、服湯得瘳、其人謝曰、吾嚮委庸醫、殆將不救死、幸有先生得免入于鬼錄矣、

〔松屋筆記六十五〕痰咳の妙藥